

前進する△デルタ 構造家・久田基治

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco◎Switch・エンタテインメント

■木村俊彦先生の下で

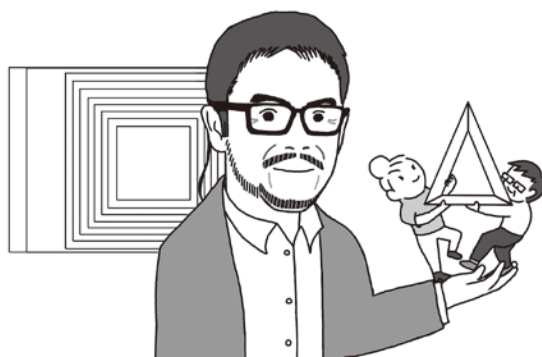
日本大学理工学部建築学科では、入学したの頃に、ペーパーストラクチャーの授業で一枚のケント紙で橋をつくるのが課題だった。先輩のつくる橋は60kgに耐えられるのに、自分のものは20kgにも達せず。おそらく負けん気が強そうな久田基治さんは、悔しかった…。その授業の担当が斎藤公男先生。他にない面白い授業に惹かれたのがきっかけで、研究室に吸い寄せられて構造を学ぶことになる。

イザ就職となったとき、木村俊彦構造設計事務所に面接を申し入れたら、「忙しいから」と取り付く島もない。それで諦める久田さんではないから「アルバイトなら宜しいですか?」とアタック。目出度く木村先生のOKが出た。事務所に行ったら、当時まだ希少価値だったコンピュータが二台あった。自由に使っていと言われ、大喜びの久田さんは、大きな目がさらにキラキラしたのでした。元々、関数電卓よりポケコン派で、プログラムをつくるのは大好き。皆がまだ手を出せずにいた高額なMacも自費で買った程の、コンピュータ先進若者だったのですから。

事務所を閉めることにした木村俊彦先生から、取締役の久田さんが事務所の引き継ぎを託されたが、状況が変わり解散となる。覇志堂が「木村先生のモノ、久田さんのモノ、ダンボールが積み上がっていて大変でしたね」と遠い目になった。そして、久田基治主宰の「構造設計工房デルタ」を開設したのが1999年のことである。

■数々の構造をこなして

手がけた構造設計の数は数百件。建築家の伊東豊雄さんが公共建築物に初めて携わったプロジェクトの八代広域消防本部庁舎や八代市立博物館・未来の森ミュージアムも久田さんが担当。熊本景観賞を筆頭に沢山の賞取ったのはご承知の通り。今もアトリエ



事務所との仕事が多く、「最初に話を聞いたら建築家のボンヤリとしたイメージを汲み取って、勝手にスケッチアップを起こしそれをたたき台にしてもらうことが多い」。構造模型は基本的にはつくりやすい方針なのは木村事務所と同様。模型は手間の割には曖昧さが残るし、今の様なネット社会では、情報量が多いバーチャル模型の方が有効だから。メールで送れるしね。空間を美しく成立させるためのタネを仕込むのが、構造家なのだから不確かなものはつけれない。

「無茶は言わない、無理は言うし多少強引だけどね」という久田さんは、構造設計者としての責務として、例えば鉄骨では工作図以上の図面を描く。工作図は確認するためのものと思っているといい切る。そんな構造家・久田基治の周りに優秀なファブが集まる所以だ。意匠を重んじるあまり、安全に問題がありそうな設計には、「クライアントにリスクの説明を」と求める。

■こだわり

シャキシャキした物言いは江戸っ子か? イイエ、愛知県のご出身。曲げず、崩さずの性格だから身のまわりの持ち物にもこだわりがある。自分のイメージにぴったりくるものがあるまで「モノが買えない」そうだ。市販の中には見つからず、町工場でつくってもらった手帳を見せてもらった。愛息にプレゼントした自転車は、実は自分が欲しかった折りたたみ。休日には借りてペダルを漕ぎ建築を見に行く。こんな愛すべき父をお見通しの息子さんを持つ。サイズをイメージするには、街と建築を見て実感することは欠かせないといします。

巨匠構造家木村俊彦から得たものを一つ挙げてもらうと、「物事を進めるタイミングです」。進化し続ける構造家久田基治に、△(デルタ)は似つかわしい。